佳作

「多様性」を考える

出雲市立大社中学校　3年　山根あゆむ

「多様性」と言われて、皆さんは何を思い浮かべますか。国や人種の違い、言語の違い、障がいの有無など、色々なことが思い浮かぶと思います。または、よく分からないという人もいるでしょう。そのそれぞれの考えも、「多様性」に当てはまると私は思います。辞書を見ると、「多様性」とは、「さまざまな種類があり、変化に富んでいること」と書いてありました。社会の中では、その「多様性」はどのように見られているのでしょうか。違いを理解しあうには、どうすれば良いのでしょうか。私が「多様性」について考えたのには、きっかけがあります。

昨年の夏休み、和菓子屋を営んでいる両親に誘われ、障がい者施設に和菓子作りの体験を手伝いに行きました。その施設は、障がいのある子どもを、休日や夏休みなどに一時的にあずかっている施設で、十人くらいの子どもがいました。行く前に私は、少し不安でした。普段から人と話すのは得意ではないのに、障がいのある子ども達と上手く接することができるか心配だったからです。施設の中に入ると、あいさつをしてくれる子や、興味をもって近づいてくる子、スタッフさんが声をかけるとすぐに集まってきてくれて、体験をスムーズに行うことができました。私は、その中の一人の子と一緒に和菓子を作りました。その子は一生懸命作っていて、上手くできなくても投げ出さずにがんばる姿に、正直少し驚きました。私の説明も聞いてくれて、できたものを見せてくれました。完成しておいしそうに食べているのを見て、私はとても嬉しかったです。私ははじめ、「相手に障がいがあるから上手く接することができないかもしれない」と、レッテルのようなものを貼ってしまっていました。しかし、全くそんなことはなく、自分がそう決めつけていたことに気づき、どうしたら良かったのかと考えました。

「障がいがあるから」「言葉が違うから」「文化が違うから」と決めつけたり、差別したり、上手くいかないことの言い訳にしないこと、違いを認め合って、一人一人を尊重する気持ちを持つこと。そうすれば、互いに分かり合える「多様性」が大切にされる世の中になると思います。

今年は、東京でオリンピック・パラリンピックが行われました。私は、オリンピック・パラリンピックの両方とも、開会式やいくつかの競技をテレビで観戦しました。そして、「多様性」の元では、個人個人は、あんなにも輝くんだな、と思いました。開会式の入場では、たくさんの国が参加し、個性豊かな服装や、民族衣装のようなものを着ている人もいました。それぞれがとても笑顔で、見ている私も楽しくなったのを覚えています。戦い抜いて互いをたたえあっているのを見たときには、戦った相手なのではなく、共にプレーした仲間なんだな、と思いました。内戦や紛争が続く国もありますが、宇宙から国境が見えないように、国の間に壁はなく、私達は同

じ地球に住む地球人だということもオリンピックを通して気づかされました。もちろん、パラリンピックでも障がいに負けない圧巻なプレーにたくさんの努力を感じ、また、あきらめずにがんばる姿は、私と一緒に和菓子を作った子と重なるところがあるな、と思いました。

人は一人一人違います。顔も声も性格も、好きなことや同じものに対する考え方もそれぞれです。違いを認めることは人権の尊重にもなると思います。「多様性」を当たり前にし、誰もが楽しくすごせる世の中になるといいです。

今年の夏も、あの施設での体験活動があります。今度は楽しみな気持ちで臨もうと思います。